

末廣稻荷神社（旧今里稻荷社）

御由緒

主祭神

宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ・稻荷大神）

衣食住、家内安全、商売繁盛、厄除など生活全般のご利益があると言われる神様です。

石切劔（いしきりつるぎ） 大明神

瓊々杵尊（にぎのみこと）

可美真手命（うましまでのみこと）

「でんぼの神さん」として知らせる東大阪市の石切劔箭神社の「石切さん」は腫れ物、病氣平癒にご利益があると言われる神様です。

末廣稻荷神社と新今里公園

太平洋戦争の前、昭和五年に開設された頃の今里新地は、現在よりも北に近鉄線の高架の前まで、東は城東運河（平野川分水路）まで、西は西の川公園が沿うななめの通りまでの広大な花街で、今里新地公園（いまの新今里公園）はその真ん中にあり、南向いにあつた演舞場とあわせて今里新地のランドマークのような場所でした。

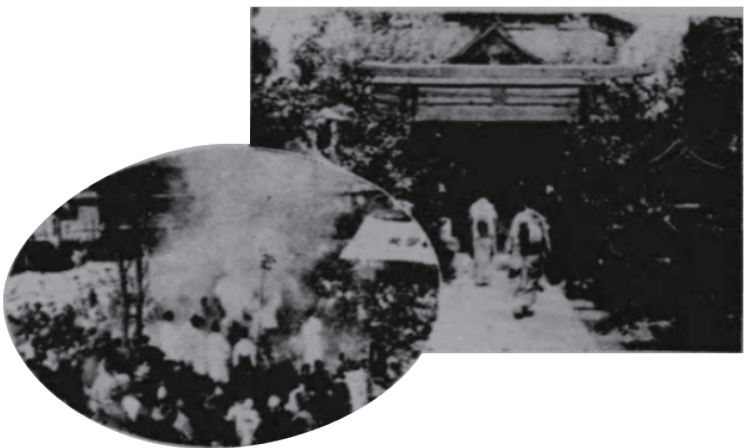
公園のグラウンドも当初からあり、最大二、〇〇〇人もいたといわれる芸妓たちの健康のために運動会やラジオ体操が行われ、公園では芸妓たちが絵出で春は夜桜見物の催しが、夏は盆おどりが行われ、地域や新地に来るお客さんで人があふれていました。

末廣稻荷神社は「今里稻荷社」として、昭和五年に今里新地開発をすすめた今里土地会社（近鉄の前身である大軌電車の子会社）が新地の繁栄を祈願して、京都の伏見稻荷大社のご分霊をおまつりしたのが始まりで、毎年四月の午の日に稻荷祭が盛大に行われ、普段も芸妓や花街関係者も毎日欠かさずおまいりする地域の守り神でした。

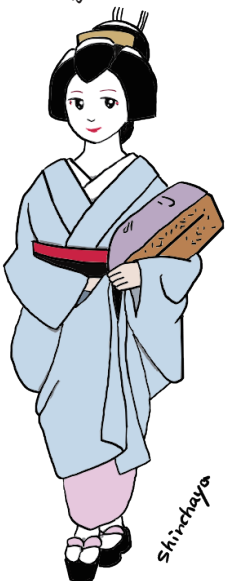
「末廣（すえひろ）」の名前は当時の今里新地が芸妓の扇子の形に似ていて末広がり縁起がよいことから来ていると思われます。

石切劔大明神がまつれたのは芸妓や町の人たちの健康を祈願するためですが、当時、石切劔箭神社と今里新地は大軌電車沿線の二大名所であつたことをしのばせます。

石切さん参詣の帰りの夜に今里新地のお座敷に寄る客も多かったようで、和菓子屋さんではお座敷の客の手土産用に石切さんにちなんだお菓子も見られるようになりました。



戦前の今里稻荷社（末廣稻荷神社）の境内と大胡麻神事の様子
「今里新地十年史」（国立国会図書館ウェブサイト）から転載



（※掲載の画像の無断転用を禁じます）